

2歳の我が子が教えてくれた

富山県黒部職業能力開発センターの小林先生からリレーを受けました北海道の佐々木です。小林先生は寡黙でクール、いつもマイルドセブンか何かをくわえている。そんな印象が残っています。「寡黙な？」依頼になつかしさ、うれしさもあり、リレーを引き受けさせていただきました。



早いもので指導員になって8回目の春を迎えました。「狭いニッポン、同じ場所だけにいてドーする！」「えいっ」と元気よく、生まれた街を遠く離れ北海道に来てから、「アツという間」に7年が過ぎました。振り返ってみるとこの間に公私ともどもいろいろなことがありました。初授業の日の前の晩の緊張感、学生と一緒に資格試験に挑戦したこと、年代は近いはずなのに価値観や常識の違う学生たちに戸惑ったこと、プライベートでは結婚をして家庭を持ったこと、子どもが生まれて親になったことなど、意識とは裏腹に身の回りの状況は大きく変わりました。当時、一番大切だったものは「ニコン」で、今は「子ども」になりました。

どの親もそうであるように、祈るような気持ちで誕生の瞬間を迎えました。妻に対する「ごくろうさま」という気持ちと、それ以上に私と妻の両親に対し深い感謝の気持ちが湧いてきました。親が自分たちをここまで育ててくれたおかげで、大切な人を授かることができたつくづく感じました。今もその気持ちは変わりません。

現在、子どもはちょうど2歳6ヵ月になりました。今も元気よく走り回っています。言葉もよく覚え、コミュニケーションもだんだんと上手になりました。実家の親からは気にかかるのか、用事もないのに毎日電話がかか

り、郵便物がしばしば届きます。ちょっとした態度、仕草に周りの大人たちは一喜一憂し、まさに我が家は子どもが心と生活の中心になりました。

このような我が子への愛情を抱き、父や母の愛情を感じたとき、初めて毎日学院にやってくる私たちの学生の親、兄弟、親戚もしくは全く別のだれかが、きっと彼らを同じような感情で見守っているのだろうと感じるようになりました。そのような「大切な人」を預かっているのかと思うと、指導員という仕事の責任の重さをひしひしと感じさせられます。

私の所属する造形デザイン科（木材加工系木工科）では、毎年3月に「修了制作研究作品展」を学院外において開催していますが、訪れる学生の親は何ともいえぬさまざまな喜びの表情を見せます。しかめっ面で現れた親が息子の作品の前に立ったときの表情は、親の「愛情」にあふれています。その姿を見ながら、私は「彼の息子に100%の力で指導できたのか？」と自問すると、答えは「ノー」で、何とも後ろめたいような、申し訳ないような気持ちになり、親の顔を直視できないでいる自分が在ります。「それではいけない」と思い毎日の訓練に臨みますが、現実の厳しさ、ギャップに自己矛盾を感じてしまう今日この頃であります。早く自信を持って、誇らしげに親の顔を直視できるようになりたいと願っております。



さて、次のリレーは神奈川県立産業技術短期大学校 産業デザイン科の佐藤先生です。パワフル&エネルギーに活動する行動力抜群の先生です。では、よろしくお願いたします。